



【連載】母と私たちの、初めての在宅ケア

私のこと、家族のこと～連載①

文責: がん・バツテン・元気隊 運営委員
大山 薫

全4ページ

はじめに／ 姉妹で、同時期にがんになる

40歳の時に乳がん罹患しました。診断名は「浸潤性乳管がんステージ1、ホルモン受容体陽性」。

部分切除手術、放射線治療、5年間のホルモン療法を継続していた2014年、9歳年上で当時53才の実の姉がすい臓がんだとわかりました。最初の症状は黄疸でした。

居住地の広島の病院で検査入院。診断が確定した時には黄疸の為の胆管ステント処置が済まされていました。手術はできず、放射線治療も不適応ということで、医師から大変厳しい状況だと告げられました。

セカンドオピニオンや誰かに相談する間もなく、直属の上司だけに事情を知らせて、姉はフルタイムの仕事をすぐに退職してしまいました。本人は親や姉妹には知らせたくないと言ったそうですが、義兄が事の深刻さに私達に知らせてくれました。

自分もがん経験者で治療中ということもあり、姉のそういう気持ちが良くわかります。私もなるべく誰にも知らせたくない、出来れば何もなかったように日常生活に戻りたいと思っていました。仲が良い友人にも伝えず、実家に戻ってきた娘2人と義兄と家族だけの暮らしがしたいと言い、通院しながら抗がん剤治療を始めました。

私は、少しでも姉の力になりたいと、新聞で知った「がん・バツテン・元気隊」主催のがんサロンや、ピアサポーター養成講座に参加し、元気隊の方達と接するうちに自分もボランティア活動を行うようになりました。

私は手術後もフルタイムのパートの仕事を続けながら放射線治療、ホルモン治療と続けてきました。担当の医師と相談しホルモン治療を5年間で終了し、定期健診のみになりだといぶん気持ちも体も軽くなり、がんの患者さんたちのピアサポート活動を続けているうちに、姉をサポート出来る力が少しずつ付いていったようです。

55才で姉が亡くなる迄の2年間、広島と、義兄の転勤で引っ越した先の名古屋まで、姉に頻繁に会いに行き、出来る限りのことはやっただけです。が、もっと出来る事があったのでは、もっと聞いてあげられる事があったのではと、悔やまれることがいくつもあります。

例えば、

がんと診断されてすぐに退職してしまったこと、診断時からの緩和ケアを受けなかったこと、

がん相談支援センターやがんサロンに全く行かなかったこと、介護保険の申請を早くしなかったこと、

緩和ホスピスについて検討するのが遅かったこと。

姉は「旦那や娘にトイレの世話をしてもらうのは嫌だから、そうだったら緩和ケア病棟でお世話になりたい」と言っていました。しかし希望は叶わず容態悪化で緊急搬送された入院先の病院で亡くなりました。

現在、私は仕事をしながら「がん・バツテン・元気隊」で事務局の一員としてボランティア活動をしています。元気隊は、福岡のがん患者団体や支援団体のネットワークです。福岡県には50ほどのがん患者・支援団体があるそうですが、その中で、在宅医療や在宅ホスピスに力を入れている「にのさかクリニック」や「在宅ホスピスボランティアの会 手と手」の理念や活動にとっても共感しました。姉にもそういう病院を受診させたかった、もし自分が再発し治療するならばぜひお世話になりたい、と強く思うようになりました。

大切な時間を家族のいる自宅で妻、母として過ごせたらどれだけ励みになりまた癒されたかと残念に思います。

その思いが、今、母の在宅ケアにつながりました。

現在進行中の記録ですが、母自身の気持や、父の要望なども訊ねながら、おりおり、掲載したいと思います。

わが家では初めての在宅ケアです。戸惑ったり不安になったりもしながら、在宅医療の専門家や患者会の仲間の助言や支えで、難関を切り抜け、きっと幸せな在宅の日々を過ごせると信じています。

父のこと／ 不要な薬をやめて体調が良くなる

2016年、共に83才の両親の体調が優れなくなってきました。

先のことを考え、両親にも地域のかかりつけ医(訪問医)を受診するように話しましたが、それぞれ自分で通院している病院があったので、そのまま通院を続けていました。

しかしこのままでは状況が良くなれないと思い、両親の通院に付き添い、診察内容を一緒に聞き、少しでも改善するように努めましたが、体調の悪さを薬でどうにかして欲しいと希望する父の体調はなかなか良くなりませんでした。

2017年3月、いよいよ体調が良くない父に、記憶障害や認知症のような症状が出始めたので、父を説得し「いのさかクリニック」に連れて行きました。診察を受け、詳しく検査したところ、多量の投薬のせいではないかと言う事で、量が増えていた睡眠薬の服用をやめると、みるみる体調が良くなりました。

その後も少しずつ必要のない薬を減らしていき、今では夕食時に晩酌できるほど体調が良くなりました。

先で通院が難しくなれば訪問診療を受けることができるので安心です。

2月21日の西日本新聞のニュースでも、「**副作用防止、高齢者処方見直しを 医師連携、厚生労働省が初の指針**」という見出しで次のような記事がありました。

何種類もの薬を併せて飲むことが多い65歳以上の高齢者に副作用などのトラブルが出るのを防ぐため、厚生労働省は21日、医師や薬剤師向けに薬の適正使用を求めた初の指針案をまとめた。典型的な症状や原因薬を例示。医療関係者が連携して患者の服薬状況を把握し、問題がある場合は処方を見直すよう促している。同省は「患者は自己判断で薬の服用を中止せずに、必ず医師に相談してほしい」と呼び掛けている。高齢者は持病などで服用する薬が増加する傾向があり、飲み合わせによる副作用のリスクが指摘されている。また、内臓の機能が弱り、薬の効果が強く出る傾向がある。

父は次々に薬が欲しかったのではなく、自分の不調や不安に耳を傾けて欲しかったのではと思います。現在は二ノ坂院長の丁寧な問診と詳しい説明を聞き、薬の減薬に納得しています。

母のこと／「肺炎」で入院する

父の体調は良くなりましたが、2017年9月頃、母の方にも問題が起こりました。

父と一緒に、母もにのさかクリニックを受診し始めてから、二ノ坂院長は診察時に日頃の体調や生活の様子など詳しく問診して下さっていました。その過程で母の体重が少しずつ減っていること、体がきつく感じるなどの変化に気付いてレントゲンを撮り、3月撮影分の画像と比べ少し気になる箇所があるので二ノ坂院長の勧めで大きな病院で精密検査を受けることになり、当日そのまま肺炎で入院になりました。

「器質化肺炎」との診断でした。大きな病気も無く元気になっていた母は肺炎と言われかなりショックを受けていました。医師から「器質化肺炎」と説明を受けても何のことかさっぱり理解出来ず、「先生はナントカ肺炎って言ってるけど、本当は肺がんじゃないの?」と言って不安で一杯の様子でした。

そして、入院して「肺炎」の治療を始めたところから、母と私たちの在宅介護への道が始まります。

(つづく)



自宅ダイニングでくつろぐ両親



福岡がん患者団体ネットワーク
がん・バッテン・元気隊

電話 090-9591-7469 (10:00~22:00)

FAX 092-873-2372

E-mail <http://ganbatten.info/contact.html>